

研究会レポート

(社)日本技術士会北海道支部

第104回、第105回 研究会報告

第104回技術交流研究会が平成18年6月2日(金)に、第105回研究会が平成18年9月13日(水)に株式会社ドーコン会議室で開催されました。

第104回研究会は、札幌医科大学医学部衛生学講座の三瀬敬治助手をお招きしてご講演いただくとともに、講演会終了後には懇親会を行いました。

技術交流研究会は、毎回第一木曜日に開催するのですが、第105回研究会は技術士全国大会と重複したため一週間遅く開催し、また会場の都合で水曜日の開催になりました。

第105回研究会では、お二人の会員に話題提供をしていただきました。

これらの要旨を掲載します。

■第104回 講演概要

『北海道内医療機関によるホームページ開設の現状と問題点』

札幌医科大学 医学部衛生学講座 助手
三瀬 敬治 氏

この10年余りの間にインターネットは世界的に爆発的な勢いで広がり、現代情報化社会の基本的インフラとなった。特にWorld Wide Web(いわゆるホームページ、以下HP)は、インターネット=HP、と解釈されるほどに一般的なものとなっている。一般の企業にとってもHPは、名刺や広告と同様に、重要な企業情報提供の手段であり、新しい会社と取引を始める場合、まずその企業のHPを見るケースは多いだろう。またインターネットの専門的知識や技術がない者でも簡単にHPを構築できるソフトウェアが安価で提供されており、個人でも情報のやり取りを楽しめる。HP製作を業務とする会社も多い。

医療機関においても状況は同じである。具体例として2002年10月に札幌市の一般診療所のうちHPを公開していたところは8.9%であったが、2006年6月現在では31.3%に増加している。また現在、札幌市の病院のうち79.2%がHPを公開している。北海道内の傾向としては、病院、一般診療所、歯科診療所の順にHPを公開している医療機関の割合が多く、札幌市は他の市町村よりもHPを公開している医療機関の割合が多い。演者が調査した医療機関のHPはリンク集として札医大のサーバ内で公開している。

(<http://www.sapmed.ac.jp/~mise/>)

しかしながらこの状況は、様々な環境でHPにアクセスする利用者がいることを忘れ、利用者、すなわち患者さんに対して不親切なHPをも量産させてしまうことにつながっている。場合によっては、まったく利用不可能なケースも生じる。

この一因としては情報転送速度の高速化、新しい技術を取り入れることが逆に災いしている場合も多い。インターネットとは本来「情報の共有」が目的のはずである。新しい技術が用いられることは素晴らしいが、ほんの少しの配慮で、さらに多くの人が情報を共有できるはずである。これは同時に地味ではあるが、その医療機関や企業のイメージアップにもつながるであろう。

研究会では、北海道内の医療機関のHPの状況を説明し、HP作成の基本的概念の説明を交え、アクセスする環境によってどのように問題が生じるかの例を紹介した。またHPを作成する場合に医療機関のみならず一般の企業においても考慮すべき点を提言した。

■第 105 回 話題提供その 1

『我が国のエネルギー政策とメタンハイドレード』
能勢 一之 氏（建設部門）

我が国のエネルギー政策は、経済産業省の総合資源エネルギー調査会で策定されている。その基本的概念である「基本計画」については、現在、再検討中であり、今秋改定される予定である。

米国でも 4 年かけて新エネルギー政策を策定し、水素技術開発、クリーンコール技術、新型原発、バイオマス等に「新エネルギー対策予算」を計上している。

ここでは、我が国のエネルギー政策の課題と北海道の貴重なエネルギー資源の開発について話題を提供した。

■第 105 回 話題提供その 2

『仮想化・お薦めできる IT 技術』
小山田応一 氏（情報工学部門）

21 世紀になって IT 技術の進歩は目覚しい…と世の中では言われています。実際にそのとおりです。IT 技術は単純にハードウェア技術とソフトウェア技術に分けられます。ここ 10 年間でコンピュータは飛躍的な性能向上を遂げ、インフラにおいてはブロードバンド通信の普及が進みました。前者は数百倍、後者に至っては 1,000 倍以上の向上で 20 世紀の LAN 並みの速度でインターネットを利用することが可能となりました。これらはハードウェア技術の進歩の恩恵ですが、それらを活かすソフトウェア技術には顕著な変化は見られません。個人の PC を見てみましょう。OS があり、ハードウェアを使用するためのドライバがあり、ワープロ、表計算ソフト、Web ブラウザがあります。これらの組み合わせは 10 年前も、現在も変化していません。年々、GUI、色、機能などが多様になったという程度でしょう。実際には様々な技術の集大成なのですが、ユーザは「技術」に感心して導入するというよりは、システムベンダの意向に沿って新規のアプリケーションやシステムを決して積極的とはいえない姿勢で導入して

いるのが現状です。

「仮想化」とは「コンピュータ上に別のコンピュータを実現する」ものであり、ソフトウェアが主役となる技術です。ソフトウェアだけで実現している場合はエミュレータと呼んでも同じです。概念としては決して新しいものではありません。大型計算機では、昔から物理的に複数のコンピュータとして扱えるように設計されています。また、PC 上でもかなり前から存在していましたが、開発者や特別なアプリケーションを使用するために一部のユーザが使用しているものでした。それが、近年の PC の性能向上とメモリやストレージの価格低下により、仮想化によるシステムでも十分な性能を発揮できるようになりました。さらに、2006 年になってから大手ベンダの仮想化アプリケーションの無償公開やオープンソースの出現などにより利用するための敷居が下がったこと、システムの信頼性向上やコスト削減に大いに有望だということで随分と話題になっています。

「仮想化」はユーザの不安を煽り立てて、導入を促してベンダが儲けるような技術ではありません。情報システムの運用・保守、開発、及び個人の利用にも十分有益な技術です。

第 106 回技術交流研究会は、平成 18 年 12 月 7 日（木）に講師の先生をお招きして講演会を予定しています。

内容が決まりましたら、HP と EPO でお知らせしますので、ご参加下さい。

また、技術交流研究会では、会員を隨時募集しています。（社）日本技術士会の会員であれば、どなたでも入会できます。

入会を希望される方、研究会に出席を希望される方は、（社）日本技術士会北海道支部事務局（出村）までその旨をご連絡下さい。

（文責：吉野 大仁）